

国名	名前の意味・由来（正式名称は英語による）
インドネシア Indonesia	正式名称「インドネシア共和国」(Republic of Indonesia)。「インド」を意味する Indo、「島嶼」を意味するギリシア語の nesos、名詞をつくるラテン語・ギリシア語系の接尾辞 ia を組み合わせて作られた合成語で、「インドの島々」という意味である。19 世紀にヨーロッパの地理学者がインド亜大陸のむこうに広がる島々の総称として考案したのが始まり。本来は、フィリピンなどを含んでおり、現在の「東南アジア島嶼部」と重なる範囲を指していたが、オランダ領東インドの民族主義者たちが、自分たちの住む領域の名称として採用し、1928 年の「青年の誓い」のなかで使い、現在のインドネシアを示す名称として一般化した。
カンボジア Cambodia	正式名称「カンボジア王国」(Kingdom of Cambodia)。建国神話によると、海の方こうからバラモンのカウンディニャが舟に乗って渡来し、現地の王女ナギと結婚した。ナギの父である竜王は、土地を覆っていた水を飲み干し、婿のために領土を拡大した。カウンディニャはそこに王都を建て、国の名前を「カンブジャ」(Kambuja) に改めた。カンボジアの名前はこの建国神話に基づく。カンブジャは「カンブの子孫」の意味で、インドの叙事詩に伝承される地名である。「カボチャ」の語源。
シンガポール Singapore	正式名称「シンガポール共和国」(Republic of Singapore)。サンスクリット語で「ライオンの都」を意味する「シンハプura」(Singhapura) に由来する。マレー王家の宮廷史書である『スジャラ・ムラユ』によると、王家の祖先がこの地に初めて上陸したとき、異様な動物を目撃するが、それがライオンであるという家臣に進言に基づき、この地に建てた王都をシンハプura と名付けたとされる。
タイ Thailand	正式名称「タイ王国」(Kingdom of Thailand)。19 世紀後半から民族名であった「シャム/サヤム」(Siam) を王国の名称としていたが、1939 年にピブーン首相が「タイ国」(Thailand) に改称した。「タイ」は「自由」の意味であると説明されているが、語源的にはラオ人などを含む民族名「タイ」(Tai, h がつかない) と同じで、本来は「人」の意味である。
東ティモール East Timor	正式名称「東ティモール民主共和国」(The Democratic Republic of Timor-Leste)。「ティモール」はマレー語で「東」を意味する timur に由来する。14 世紀のジャワ語文献に Timur の名で記録されている。ジャワ島、バリ島に連なる小スンダ列島の最東端に位置するところから「ティモール」と呼ばれ、現在の「ティモール」になったと推測される。のちに島の東部はポルトガル領となり、1945 年にインドネシアがオランダから独立してもポルトガル領として残った。1975 年にインドネシアによる武力併合されて東ティモール州となったが 2002 年に独立した。Leste はポルトガル語で「東」の意味である。なお Timor Lorosa'e (ティモール・ロロサエ) は公用語のテトゥン語で「東ティモール」の意味。
フィリピン Philippines	正式名称「フィリピン共和国」(Republic of the Philippines)。1543 年にスペインのビリャロボス遠征隊がフィリピン諸島に到達し、これらの島々を当時のスペインの王子フェリペ 2 世 (のちに国王) にちなみフィリピナス諸島 (Las Islas Filipinas) と名付けた。「島々」なので複数形。現在の国名はその英語表記である。
ブルネイ Brunei Darussalam	正式名称「ブルネイ・ダルサラーム国」(Negara Brunei Darussalam)。「ブルネイ」は現地の古来からの地名である。中国では唐代から「渤泥」の名で記録されている。ボルネオも同じ語源である。「ヌガラ」はマレー語で「国」、「ダルサラーム」はアラビア語で「平和な土地」を意味し、イスラームの教えが守られる国のことを意味する。
ベトナム Vietnam	正式名称「ベトナム社会主義共和国」(Socialist Republic of Vietnam)。1802 年にベトナム全土を統一したグエン朝が使い始めた中国語の国号「越南」(ヴィエトナム) が「ベトナム」の由来である。越族は中国長江南方に分布した民族で、「呉越同舟」で有名な越も越族の国の一つである。ベトナム人は自らを越の子孫とみなしており、「越南」は「南の越の国」を意味する。
マレーシア Malaysia	正式名称「マレーシア」(Malaysia)。古来からスマトラ島東岸、マレー半島、ボルネオ島沿岸に住む民族は「ムラユ」(Melayu) と呼ばれてきた。その英語化した名称である「マレー」(Malay) にギリシア語で「国」などの意味をもつ接尾辞 ia を組み合わせて作られた合成語。ムラユがサンスクリット語でインドの南に位置する山の名前である「マラヤ」(Malaya) に由来するとする説もある。
ミャンマー Myanmar	正式名称「ミャンマー連邦」(Union of Myanmar)。この国の現地名称は、公式の文語では「ミャンマー」(Myanmah)、日常口語では「バマー」(Bamā) であり、いずれも 12 世紀の碑文に記録されている民族名「ムランマー」(Mrammā) が音変化したものである。Myanmar と Burma はそれぞれの英語表記である。日本語の「ビルマ」はヨーロッパでの呼称が (おそらくオランダ語経由で) 江戸時代に入ったものである。
ラオス Laos	正式名称「ラオス人民民主共和国」(Lao People's Democratic Republic)。「ラオ」(Lao) は古くからこの地の民族名として使われてきた。Laos の s はフランス語の複数形であり、フランスの植民地であったときの表記の名残である。日本語の「羅宇」の語源。

東南アジア古典文化論

日付： _____ 氏名： _____ 学籍番号： _____

NHK 特集「アジアの古都：ジョグジャカルタ」(2002年放映 50分)

ビデオを見る前に書いてください。

1. 東南アジアのインドネシアにある「アジアの古都：ジョグジャカルタ」というタイトルから、どのような文化的特徴を予想しますか？自由に書き出してください。

ビデオを見ながら、または見たあと、以下の指示にしたがってください。

2. 見る前に思っていたところと違っていた点、逆に同じだった点を書き出してください。

3. イスラーム的要素、インド的要素、土着的要素と思った事柄をそれぞれ書き出してください。

4. そのほかビデオを見て感じたこと疑問に思ったことを書いてください。

歴史を構造化するとは？

- ・ 時間・空間・社会による分節（メリハリ）を設ける。この講義では文化（宗教）を重視。
- ・ 東南アジア史全体をブロックに分け、ブロックを以下の時空間セット I~VII でくくる。
- ・ セットとは別に 3つのサブセットを設ける。
- ・ 各セットの特徴と画期となるできごとを把握する。
- ・ なお、言うまでもないことだが、各ブロックやセットが同じ色で均等に染まったわけではなく、おのずとグラデーションがあり、さらに時間と共に変化したことを忘れないで欲しい。

- | | |
|-----|-----------------------------------|
| I | 基層文化が卓越した地域・時代 (A1~A4+B4+C4) |
| | 初期国家の出現 (A2+A3 の末期、B2+B3 に先行する時代) |
| II | 「中国化」した地域・時代 (B1+C1) |
| III | 「インド化」した時代・地域 (B2 大陸部、B3 島嶼部) |
| IV | 上座仏教化した地域・時代 (C2) |
| V | イスラーム化した地域・時代 (C3) |
| | 「交易の時代」(C1~C4 を貫通する時代) |
| VI | 列強により植民地化された地域・時代 (D1~D4) |
| | 日本軍政期 (D1~D4 の末期) |
| VII | 国民国家形成の地域・時代 (E1~E4) |

I 基層文化が卓越した地域・時代 (A1~A4+B4+C4)

地域： 東南アジア全域。

時代： 紀元後 5 世紀前後まで。東西海上貿易の発展に応じて、土着の初期王国が出現。ただし、ベトナム北部は紀元前 2 世紀に中国に支配され、フィリピンは後代まで基層文化の時代が継続した。

概要： モンスーンの発見による東西海上交易ルートが確立するに応じて、中継拠点としての港市などの初期国家が形成された。さらに、東南アジアの金や香料・香薬・象牙・玳瑁などの熱帯産物の需要も増加。自称「大秦王安敦」（ローマ皇帝マルクス・アウレリウス）の使者の到来。

- ・ 扶南：1 世紀末、クメール人の王国。メコン川デルタ地域。シャム湾に位置する外港オケオ。
- ・ 林邑：2 世紀末、チャム人の王国。ベトナム中部。
- ・ その他、ビルマ南部にモン人の国家。マレー半島両岸にも港市。

特徴： 精霊信仰（アニミズム）が卓越。首長制社会。水稻耕作、焼畑農業。根菜農業。銅鼓。高床式住居。アウトリガー・カヌー。

補足： ベトナム北部は中国の支配に入り、「中国化」した。フィリピンではバランガイとよばれる首長社会がフィリピン南部のイスラーム化あるいはスペイン人到来まで継続した。

II 中国化した地域・時代 (B1+C1)

地域： ベトナム北部。

時代： B.C.111 年、漢の武帝は南越国を征討し、交趾、九真、日南を含む 9 郡を設置した。中国は、ここを經由して東南アジア（中国は「南海」と呼んでいた）の物産を得た。

概要： 1009 年、李太祖がリー（李）朝を創設し、中国から独立。1174 年に中国から安南国王の称号を受ける。13 世紀、チャン（陳）王朝は、元の攻撃を 3 度にわたって撃退し、民族意識が昂揚するが、14 世紀になって国力衰退。1407 年から 21 年間、明朝の支配下に入るが、レー（黎）朝が独立を回復（1428 年）。その後、北部のチン（鄭）氏、中南部のクアンナム政権の支配期を経て、タイソン反乱の後、南北を統一しフエに都をおいた

グエン（阮）朝（1802年）はベトナム（越南）を国号とした。

特徴： 「中国化」。10世紀まで中国により直接的に支配。11世紀の独立後はベトナム人自身が中国型の国家モデルを追求。中国系大乘仏教、儒教、道教。律令制度。漢字の導入。ベトナムは中国をモデルとした「小中華」帝国の形成を目指した。

補記： ベトナム中部・南部のチャム人（チャム人の王国連合の総称）は、「中国化」せずに「インド化」（さらにのちには「イスラーム化」）した。チャンパ（チャム人の王国連合の総称）は、15世紀にレー（黎）朝によって滅ぼされた。

III インド化した時代・地域（B2 大陸部、B3 島嶼部）

地域： ベトナム北部とフィリピンを除く東南アジアのほぼ全域（とくにインドシナ半島南部、大陸部の沿岸部、マレー半島を経てスマトラ島、ジャワ島にいたる地域）。

時代： 5世紀以降。

特徴： 「インド化」：インドによる直接支配ではなく、現地権力によるインド文化の受容。インド系文字（南インド系ブラーフミー文字）、ヒンドゥー教、大乘仏教、部派仏教（「小乗」仏教）、サンスクリット（の語彙）、ヒンドゥー叙事詩（ラーマーヤナ、マハーバーラタ）、王権思想、世界観、歴史観、建築、美術、芸能など。この地域はその後「上座仏教化」したが、インド的影響は残存している。

B2 大陸部

概要： クメール人の王国（真臘）

- ・ ジャヤヴァルマン2世（8世紀）：アンコールに王国を創建。
- ・ スーリヤヴァルマン2世（12世紀）：アンコール・ワットの建設。
- ・ ジャヤヴァルマン7世（在位1181頃～1218年頃）：アンコール・トムの建設。
- ・ モン人の王国：ドヴァーラヴァティ王国。チャオプラヤー川下流。
- ・ ピュー（驃）人の王国：エーヤーワディー川流域。
- ・ ビルマ人の王国：パガン朝（11世紀）。ピューの王国を吸収。

補足： ベトナム中部・南部ではチャム人が「インド化」した。パガン朝では大乘仏教と上座仏教が併存した

資料： 『真臘風土記』（13世紀末）

B3 島嶼部

概要： シュリーヴィジャヤ（7世紀半ば～11世紀）：スマトラ島東岸（マラッカ海峡）。

- ・ シャイレンドラ朝：ジャワ島中部。大乘仏教を信奉し、ボロブドゥール寺院を建造
- ・ マタラム王国：ジャワ島中部・東部（10世紀に移動）。ヒンドゥー教を信奉し、プランバナナ寺院を建造。
- ・ カディリ王国：ジャワ島東部。1006年頃、内乱で一時分裂するが、再統一。
- ・ シンガサリ王国：ジャワ島東部。13世紀。
- ・ マジャパヒト王国：ジャワ島東部。シンガサリ王国の後継者。元軍を撃退して成立。東南アジア島嶼部の大部分を影響力をもった。宰相ガジャマダのもとラージャサナガラ王の時期（14世紀中葉）が最盛期。

資料： 義浄『南海寄帰内法伝』（7世紀末～8世紀初）

IV 上座仏教化した地域・時代（C2）

地域： 東南アジア大陸部（ベトナムを除く）ほぼ全域

時代： 13世紀以降（現代まで）。ただし、ビルマでは11～13世紀にパガン朝が上座仏教を信奉していた。

概要： ビルマ以外の大陸部では「タイ系」諸民族の国々があいついで勃興

- ・ スコータイ王国（13世紀後半～1438年）：チャオプラヤー川上流支流。タイ文化の源泉とみなされる。アユタヤに併合される。
- ・ アユタヤ王国（1351～1767年）：チャオプラヤー川下流域。アンコールを侵攻しクメール人の王国を破る（クメール人はプノンペンに遷都（1434年）、上座仏教化する）。
- ・ ラーンサーン王国（1353年建国）：ラオ人（「タイ系」）の王国。メコン川流域。
- ・ タウンゲー王国（1486～1752年）：ビルマ人による統一政権。アユタヤ征服に成功（1569年）。
- ・ コンバウン王国（1752-1885年）：ビルマ人による統一政権。
- ・ ペゲー王国（14世紀～1539年）：モン人の王国。下ビルマ。
- ・ アヴァ王国（1364～1555年）：シャン人（「タイ系」）の王国。上ビルマ。

特徴： 上座仏教。パーリ語経典（文字は各言語によって異なる）。サンガ（僧団）の形成。

補足： ビルマではビルマ人の他にシャン人やモン人が勢力を持っていた。

資料： ラーマカムヘン王碑文（1292年）。周達観『真臘風土記』（13世紀）

V イスラーム化した地域・時代（C3）

地域： 東南アジア島嶼部（フィリピンを除く）ほぼ全域

時代： 15世紀以降

概要： 13世紀末、スマトラ北部のサムドラ・パサイが東南アジア最初のイスラーム王国。14世紀末、マレー半島にマラッカ王国が勃興。明の保護下にマラッカ海峡の海上貿易センター。イスラームを受容し、東南アジアのイスラームのセンター。アユタヤと共に「交易の時代」の中心勢力。1511年、ポルトガルがマラッカを占領すると、商業拠点は各地に分散。

ジャワ島のイスラーム化。16世紀、ドゥマック王国。17世紀、マタラム王国。

特徴： イスラーム。アラビア語、アラビア文字。イスラーム。シャリーヤ（イスラーム法）。

補足： フィリピンも南部からイスラーム化（スールー王国）したが、スペインのキリスト教勢力によって南部に押し込められた。ベトナム中部・南部のチャム人もイスラーム化した。

C1~C4「大交易時代」

地域： 東南アジア全域

時代： 15世紀～17世紀中頃

概要： 東南アジア全域と隣接するアジア諸海域に広がる交易活動が活発化した。日本の朱印船貿易、琉球王国の活動、ヨーロッパ人の到来と活動も「大交易時代」のできごとである。

VI 列強により植民地化された地域・時代（D1~D4）

地域： タイを除く東南アジア全域

時代： 17世紀～20世紀中頃。

概要： アジア間貿易が継続。欧米で産業革命が進むと、列強による原材料輸入・生産物輸出先としての東南アジアの植民地化が進展。19世紀末からは各地で民族主義運動が芽生える。

- ・ スペイン：フィリピン（のちにアメリカが支配）
- ・ ポルトガル：東ティモール
- ・ オランダ：インドネシア
- ・ イギリス：ビルマ、マレーシア、シンガポール、ブルネイ
- ・ フランス：ラオス、ベトナム、カンボジア

- 特徴： キリシト教（スペイン、ポルトガルはカトリック、オランダ、イギリス、フランスはプロテスタント）。ただし、プロテスタント諸国は布教にはあまり熱心ではなかった。
- 補足： タイは植民地化されず。アジア・太平洋戦争における日本の東南アジア支配（1941～1945年）はセット VI の最終段階とみなせる。

VII 国民国家形成の地域・時代（E1~E4）

- 地域： 東南アジア全域
- 時代： 第二次世界大戦終結（1945年）後（現代まで）
- 概要： 植民地からの独立を達成し、国民国家の建設が進む。世界的な「冷戦」のもと東南アジアではベトナム戦争が1975年まで続く。1967年、ASEAN（東南アジア諸国連合）が創設。当初は5か国。その後、地域協力機構として発展し、2015年、AEC（ASEAN経済共同体）が発足。
- 特徴： 植民地からの独立後、国民国家建設のため、多くの国では、党や軍や大衆動員組織によって国民を統制し、資源を経済開発に注力する強権的な「開発主義」的政策が取られたこれには日本の経済進出も関与。

参考文献

- 青山亨. 2014年. 「東南アジアの歴史を概観してみよう—東南アジア史の構造」今井昭夫（編集代表）『東南アジアを知るための50章』（エリアスタディーズ129）pp.24-36, 明石書店.
- 桃木至朗. 1996年. 『歴史世界としての東南アジア』（世界史リブレット12）山川出版社.